

方法 新・方法 立会記

(. . . - / - . . .)

全13回の講義を通して、芸術について私が感じたことは段階的に目に見えない世界へとその存在意義を求めようになっていったということである。また芸術作品はもはやその感覚的な評価に主眼を据えるのではなく、その作品がどのようにして他の作品との差異を持つかという言語的な意味合いにその価値が据えられているように思われる。中世の写生的な絵画はその美点や鑑賞点をそのビジュアル的な要素の中にもとめていたが、近代化が進むに連れて、絵画作品の鑑賞されるべき点は、より言語化された概念的なものへと移行していった。個人的にこのような芸術の進行は芸術に付随する価値観の破壊によって成し遂げられてきたように思われる。ピカソは、例えば、その平面的なキャンパスに今までの絵画ではタブーとされてきた描き方を導入することによって、その新しい、独特な作風を作り上げた。また、デュシャンは芸術は美しくなければならないという定義に異議申し立てをする形で芸術の幅を広げている。

今日における芸術作品の評価はその作品が美術の歴史の中でいかに意味を持つかという方向に進んでいるようである。そのような作品の価値、意味は、個人的に、相対化の中にしか存在しておらず、そのモダニズム、ポストモダニズム的な方法に対する解決策も言語の意味合いの中にのみ求められているように感じられた。まるで今度は作品が意味性を持たなければならないという暗黙の掟の産物であるかのようなようである。

方法もしかりである、中ザワ氏の芸術は方法の協調によってその斬新さを獲得しているが、その斬新さというのは過去の美術作品との比較、対象の中に生まれてくる新しさのことであるため、その作品の評価される点はその概念的な位置に占めるものが極めて大きい。方法もモダニズム、ポストモダニズムの解決をある種意味的な面から試みているため、結局のところその着地点は言葉によるものの中である。美術がその斬新さにおいて評価がなされることが方向付けられたときからその作品はその実体なくしても評価されるという幽体離脱のごとき現象が起きていると思う。